●小学校から幼児教育へ

その年の暮れに近いある日のこと、大阪の小路幼稚園の井上文克園長が来訪されました。「『一年生でも新聞が読める』(昭和 38 年、講談社刊) を読んで感動した。幼稚園児もやれるのではないか」と言うのです。

これまでの小学生の指導で、一年生は六年生配当漢字の三倍もの漢字が読めることを身をもって知っていた私には、「幼稚園でも年長児なら五、六年生以上に漢字が読めるに違いない」という確信めいたものがありました。それで、年が明けて幼稚園がはじまると、すぐに大阪に出かけたのです。

幼児を指導するのはこれが最初です。それでも、自信をもって昔話をしながら、話の中に出てくるキーワードを黒板に、何の説明もせず書き付けていきました。その後、その言葉を□にするときには、さり気なく書き付けられた漢字に手を触れます。

こうして話し終えてから、黒板に書き付けられた十数字の漢字の一つを指して、「この字を読んでみよう。ハイッ」と言うと、幼児たちが何のためらいもなく一斉に読んだのには、正直私も驚きました。

年長児の漢字適応力は決して一年生に劣らないことが、このとき、はっきりとわかったのです。「これなら、年中児にもできるに違いない」と、すぐに年中児にも同じ様にやってみました。すると、年中児も年長児に負けず劣らず、しっかりと漢字を読みます。そして、ついには、年少児にも漢字教育は少しも抵抗なくはじめられることがわかったのです。

井上園長は、このことを仲間の園長さんたちに話し、漢字教育をすすめてくれました。そこで、その頃毎週月曜日に大学の講師を勤めていた私は、大学の講義を終えると、その日のうちに大阪へ行き、毎日、井上園長の案内で幼稚園を訪れ、そこの園長さんに漢字教育を実践して見せる、という生活がはじまりました。

このおかげで、四月の新学期から小路幼稚園、文化幼稚園、旭学園幼稚園など、大阪の有力な幼稚園数園で、そろって漢字教育がスタートすることになったのです。

ところが、このことがマスコミで大きく取り上げられますと、たちまち、あちこちからたいへんな非難が巻き起こりました。「かなを教えるのも早すぎるというのに、漢字を教えるとは何という暴挙か」と言う訳です。

ところがこのとき、わが国屈指の国語学者であり、大ベストセラーとなった『日本語練習帳』の署者としても知られる大野晋先生が、『週刊朝日』の依頼を受けて、大阪の実践幼稚園を視察し、『漢字で教育する幼稚園　大阪市での新しい試みをみて』という表題で、

「『漢字で教育』という方式――これはご存知の石井勲氏の方式の拡張なのだが――、これがどんな成果をこれからあげるか。固定観念の打破によって前進があるとすれば、この新教育は注目に値する試みである」

という趣旨の一文を発表しました（前頁参照）。

これによって実践者たちは大いに力づけられ、実践園も次第に増えていったのです。

「漢字で教育」する幼稚園　大阪市での新しい試みをみて

学習院大学名誉教授　大野　晋氏

漢字かな交じり文が、日本語の標準的な表記法であることは誰しも認めるところだ。してみれば漢字の学習法に、何か新しい方法は無いものか。漢字教育を根本的に考え直して生徒に対するなら、もっと効率のいい教育が行われるのではないか。

社会科とか理科とかと、小学校一年から分けて教育をしているが、二年になり。二年になっても、教科書も読めないために、社会科も理科も自分の科としての勉強ができずに、教科書の読み方に時間を使っている所は非常に多い。それでは、時間がもったいなさすぎる。

幼稚園への入園率は年々増加の一途をたどっている。この新鮮な時期に、基本的な漢字の読み方を覚えてしまうなら、こんな便利なことはないだろう。少なく見積もっても、幼稚園で平均四〇〇字くらい読めるようにすることは可能らしい。

「漢字で教育」という方式――これはご存知の石井勲氏の方式の拡張なのだが――、これがどんな成果をこれからあげるか。

固定観念の打破によって前進があるとすれば、この新教育は注目に値する試みである。

（『週刊朝日』・昭和四十三年七月十二日号より）